

マージナル所員の藪眺み

木 幡 文 徳

私が専修大学社会科学研究所の所員となったのは、正確な年度はすっかり忘れてしまったが、専修大学に助手として就職し、専任講師を経て助教授になってからだと記憶しているので、専修大学の教員となってから随分と時間がたっていたことは確かである。こんなことから書き出したのにはちょっとした訳がある。というのはこのことが、社研のその当時（1970年代と大ざっぱに言うておこう）有していたある種の性格を極めて個人的視角からではあるが感じることができたからである。私が「社研」の所員とならなかったのは、私が社研の所員となることの希望を殊更強く示さなかったこともその理由の一つではあるが、私に「社研」の所員となるように進め、推薦する所員がある時期まで存在しなかったのである。つまり私が「社研」の所員として適確かどうかという点で適確であると判断する所員がいなかったことを意味する。このことは当時は他の学部状況はよく知らないが、少なくとも法学部の所属の私には「社研」にはある種の「選別」の論理が働いていると感じさせたのである。法学部所属の教員で社研の所員となっておられた方々もそう多くはなかったが、概して言えば、政治、法律学の分野で理論に関心のお在りの方々が所員となっていたようであり、法律学の分野からすれば、法社会学的関心、あるいは法の科学性の追及に関心のある方々が、「社研」所員として適確とされていたと勝手に推測したりもしている。そこからすれば、私のように一応伝統的概念法学を主な仕事とするものは適確ではないと判断されてもやむを得ないことになろう。ともかくその「選別」を通じて「社研」はある種の性格を有していたものと判断される。それは全く私流儀に言えば学問研究と社会に対する批判的精神を結合させた「運動体」としての性格である。

私はここで「社研」の所員となることの「選別」を受けたことの不満を述べようと言うのではない。むしろこの「運動体」としての性格が近時「社研」から消えているのではないかと憂慮するのである。「運動体」としての性格を強く打ち出すことはややもすれば「社研」を閉鎖的な方向へと導きかねない事には十分警戒すべきではあるが、これは「社研」のバックボンの一つとして失ってはならないものではないかと思うのである。そこで尻切れトンボ的に、「社研」の活動への一提案をすれば、「社研」の所員の多様性から見て、現在社会的に問題となっている事柄について学際的な研究企画を立てそれを報告する場としてのシンポジウムの開催などを通じて、その社会的問題についての専修大学に所属する教員のアピールとして受け取られるような活動を期待したいのである。